

以前、学校ではない所に勤務していたことがある。その場所は、隣に大学があるところだった。昼休みの大学と言えば、「学食」である。年に数回ではあるが、隣の大学の見学も兼ねて、学生食堂に行ったことがある。

学食と言えば、安い、早い、うまいである。この大学の学食は、まさしくそうだった。ただ、居心地がよくなかった。まわりは、ほとんどが女子学生なのである。我々はというと、見るからに部外者という雰囲気を漂わせた集団である。

この大学の学生さんには、いつも感心させられた。あいさつがすばらしいだけでなく、こちらが困っていると、声をかけたりしてくれる。食券の買い方、食券を出す場所、座席の確保と、初めてのときは、いろいろとどぎまぎすることが多い。

いつぞやは、困ったことがあった。少なからず緊張して学食に並んでいると、遠くの方から「高澤先生」という声がした。「どうして、こんなところで」と思うのだが、以前勤務していた中学校の卒業生だった。それも、担任をしたわけでもなく、授業の担当もなく、部活動も違う。にもかかわらず、呼んでもらえた。

しかし、こちらとしては、うれしいわけがない。恥ずかしいし、教員であることがばれるではないか。挙句の果てには、近づいてきて、しばし昔話に花が咲くという展開である。

最近、学生食堂の閉鎖や縮小が続いているそうである。昔は、講義が終わると、学食の座席の争奪戦があったものである。そのぐらい、昼食を学食でとるのが当たり前だった。私のことになるが、学生時代にチキンカレーを何度食べたかわからない。280円だった。毎日、チキンカレーだった。それでも、学生の身だと飽きないから不思議である。

長男が、大学に入るときに、学生食堂の「ミールクーポン」を購入した。一度に、結構な金額を払うことになるが、長い目で見れば、お得である。だが、これは、あくまでも長男が学生食堂を利用するという前提である。性善説に基づいている。クーポンを買ったはいいが、学食を利用しなければ、親としては泣くしかない。

ミールクーポンを買えば、学食を利用することになり、栄養を摂ることができるだろうという家人の考えだった。このクーポンの魅力は、朝食が無料になるという点だった。長男は、このメリットを最大限に活用してくれた。

学生食堂が閉鎖したり縮小したりしているのは、コロナの影響だけではない。長女の大学の学生食堂も見学したが、広いスペースで座席の争奪戦など起こりそうもない雰囲気である。ずいぶんとゆったりしている。都会のせいもあるが、安くはない。ここで毎日食べるのは、経済的にきついようにも思う。世の中には、学食に対抗できるものが溢れている。

学生時代をミールクーポンで生き抜いた長男は、都会のオフィス街のランチには、ほとんど行かない。金額的にやりくりができない。そこで、大型連休中に帰省したついでに弁当箱を買い、都会へと戻っていった。自分でお弁当を詰める気である。中学時代に、自分でお弁当を詰めていた実績のある彼ならばできるだろう。

知らない間に、学生にとっての学食の位置づけがだいぶ変わったようである。少し寂しい気もする。私にとっては、学食と言ったらチキンカレーなのだが。